



つばめ農園おひさま便り

32

安溪貴子・安溪遊地

干ばつの中での農作業

今年、ほとんど雨が降らないまま、六月二八日に梅雨明けを迎えました。一九五一年からの統計史上最短の一七日間の梅雨でした。その後もほとんど雨が降らず、約六八ヘクタールの水田を潤すはずの福谷溜池なほけの水も、六月から二日おきに給水制限をしました。七月に入って、安溪大慧もメンバーである班長集会で、まとまった雨があるまでの給水停止が決定されました。二〇一二年七月末の土石流災害のために、溜池の改修工事が必要になって給水ができなかった年以來、危機的な状況です。こうなると、慈雨を祈るしかありません。それでも、つばめ農園の農作業は待ったなしです。

五月二五日、阿東つばめ農園の営農ソーラーの下に大豆を播種しました。芽が出てくると、子育て中のキジバトたちが三〇羽ほど舞い降りてついばんでいます。鳥の忌避剤兼殺菌剤として、チウラムという農薬を豆の種子にまぶすのが一般的ですが、化学物質にたよらない阿東つばめ農園ではもちろん使いません。畑の全面に、鳥よけネットを張ることにしました。ソーラーパネルを支える架台の柱の間を縫うように張

るのですが、手間は普通の倍ほどかかります。暑さと乾燥に負けて、大豆の発芽率は一〇分の一以下でした。育ってきた数少ない苗を山側に集めて移植し、出荷せずにとつてあった予備の種子を谷側に再び蒔くことにしました。生えてきた草にトラクタをかけて、管理機という小さな耕運機で播種、発芽を確保するための、水路からの給水がかろうじて間に合いました。

一方で五枚の田んぼにはイセヒカリの田植えの作業が重なっています。それぞれ二回の代掻きのあと六月六日から田植え、六



営農ソーラーの下で大豆の除草をする
山口県立大学国際文化学部の学生たち

月一三日からは除草機で二四日までそれぞれ除草を三回くりかえし、合計一五回の除草機かけをしました。乗用除草機では、どうしても機械がターンするところの苗が敷き潰されますので手で補植しながら手除草と続きます。その間に畦草刈りも必要です。七月はじめから一週間は、遊地が胆石で入院というハプニングがあり、労働力が減る一方、八人の山口県立大学生が地域実習という科目でまる二日来てくれて、大豆の除草や畦草あつめなど、機械ではできない部分をカバーしてくれました。

宮本常一「抵抗の場としての地域社会」を読む

話は飛びますが、宮本常一先生は、本誌の五月号で紹介した平和憲法の生い立ちについてだけでなく、地域社会の住民の、政府や資本家の思想や行動に対する憤りが暗殺の形をとった大正昭和の歴史についても述べています（『朝日ジャーナル』昭和四八年一月一九日号、未来社の著作集第一五巻に再録。http://ankei.jp/yuji/?n=2584）。——ではなぜ地域社会は大切にしなければならぬのであるか。……明治末から大正へかけては地域社会のかがやかしい時代で

あった。地域住民は自主的で、そこに資本的蓄積によって銀行をおこし、その銀行を利用して自分たちの生活をゆたかにするために電車を通し汽車を走らせ、電灯会社を作り、製麺工場や紡績工場をおこし木工場もつくった。そしてそこに住む人たちの多くは株主としてこの事業に参加した。ただ経済的基礎が貧困であったために経済的変動に弱かったけれども、自己のえらんだ道を歩みつづけて来たといつていい。

しかし、戦争を一つの契機として中小銀行は統合され、小さい会社も合併をすすめられていった。と同時に地域住民の主體的な地域経営の意欲は消されていった。

地域社会の住民の、政府や資本家の思想や行動に対する憤りは暗殺という形で展開していった。原敬の暗殺から始まって、浜口雄幸、井上準之介、団琢磨の暗殺は現実も前途も暗くなりゆく農民社会の雄叫びのようなものではなかったのだろうか。しかもその暗さはなお続いている。ただ農以外の食料や産業が発達して、人びとがその方に転じてゆきははじめたことによって、戦前のように切羽つまったものが見えない。しかしそのことによって農村問題は解決されたのではなく、そのままのこされている。同時に農民たちの住む地域社会の問題もな

ら解決されてはいないのである。それは工場をたてて、地域住民の労力をそこに吸収させるというようなことだけでは解決するものではない。工場の資本が地元のものでない限りは工場自身もしよせん他所者であり、利潤は事業主体に吸収され、地元住民は工場の雇用者として隷属を強要されたにすぎない。瀬戸内海のごときも他所者資本の無責任さがそのような現象を生み出していったのである。いわば今日の開発は資本によって国内植民地をつくつていき、地域住民はこれに隷属せざるを得なくなりつつある。このことに対して住民の抵抗は当然起こつていい。だが地域住民に荷担するものは少ない。地域住民の抵抗がどのように困難なものであるかは水俣病患者たちの運動の中に読み取ることができ

る。地域住民のために不幸をもたらす産業ならば、これを停止してよいという覚悟がなければヒューマニズムは確立されない。しかも多くの場合、事業そのものは災害、公害をよびおこすまでは決して根本的対策を考えないのが、政府、資本家共通して見られる態度ではなからうか。——（つづく）

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ a@ankei.jp

http://ankei.jp



QRコードにスマホをかざすと、サイトが見られます。